

活動状況報告書（9-11月分）

スポーツコース 太田 ゆき菜

9月中旬にアメリカへ戻り、大学内の障がい学生をサポートする施設である Disability Resource and Education Service で研修を続けています。あっという間に3ヶ月が終了したので、今セメスターの様子を報告したいと思います。

今セメスターも車いす陸上チームの朝練から1日がスタートします。用具類の準備を行い、寒くなるまでは外で、気温がマイナスになり始めてからは室内のローラーを使って練習を行っています。私自身も自転車でフォローしたり、レーシングチェアに乗って一緒に練習したりしています。実際に練習を行うことで、競技の理解に役立ち、選手との信頼関係の構築や、用具の修理、トリートメント時の理解、グローブ作成時の工夫などに役立っています。朝練が終わると怪我や痛みのある選手のトリートメントを行います。トリートメントの種類はいろいろですが、アメリカではPTやATがカップリングやスクライピングという日本でいう吸い玉やカッサに似たような治療も行います。日本ではこれらは鍼灸師が施術する分野だと思うので、アメリカで東洋医学が根付いていることにはじめは驚きました。遠征先でも手軽に持ち運べる道具で治療できるので、度々活用されています。選手のトリートメントが終わると9:30頃になり、障がいを持った一般の学生がリハビリに來たり、車いすバスケットボールの学生選手がストレーニングしてくるので順次対応していきます。リハビリでは脳性麻痺によりパワーチェアを使用している学生が多いため、歩行器やクラッチを使った歩行訓練やエクササイズなどに加えて、Wi-Sportsを使って運動したり、ポッチャをしたり。特にアダプティブスポーツはアスリートだけでなく、多くの方が楽しく運動できる優れたリハビリ方法だと思います。また、隙間時間には3Dプリンターを用いて選手のサイズや好みに合ったレーシンググローブを作成したり、トラベル用の簡易車いす作りのプロジェクトに関わったり…。そんな感じで毎日あっという間に過ぎ去ります。

週末になると毎週末のように遠征に出かけました。シカゴ、テキサス、ワシントン、ニューヨーク…、車いすマラソン、車いすバスケ、クラス分けと目的もそれぞれで、エリートアスリートに対するプロフェッショナルでビップな待遇から、青春の詰まっているカレッジスポーツ、業務に追われる裏方仕事など、色んな立場で大会を経験することができました。そしてアメリカは広いですが、それぞれの地域に素晴らしいアダプティブスポーツのプログラムがあり、それらを作っているのはやはり情熱を持った人たちで、それぞれの地域に、この人！というような人達がいます。アメリカの規模の大きいファシリティや華やかなところに目がいきがちですが、そこで地道にプログラムを作り上げている人がいるからこそ、そのファシリティが上手く生きていくのだと感じました。

また、人生初のマラソン時に先導車両に乗るという経験をしました。ニューヨークシティーマラソンにおいて車いす運び、用具の調整のお手伝いなど、通常のサポートに加えて、大会当日は車いすプロアスリートグループのサポートで、選手が乗ったバスが時間までにスタート地点に辿り着けるように道路を見ながら運転手を急かす(アメリカらしい…)仕事、レース中は先導車の後部座席に座り、先頭選手と一定の間隔を保ち続けるために、スピードの指示をドライバーに42.195キロし続ける仕事など…大会運営に色んな仕事が必要なこと、物凄い多くの人達の手で大会が成り立っていることを痛感した貴重な時間でした。毎年世界では800以上のマラソン大会が開催されているとされていますが、そのうちワールドマラソンメジャーズの称号を得ているのが、NYCマラソンや東京マラソンを含む6つの大会です。その全てで車いす部門があり、2022年にはシリーズ上位入賞者の賞金額は健常選手と同じになると発表されるなど、車いすトップアスリートも健常トップアスリートと同じような待遇を受ける動きが広がっています。下肢の力を使わず、42.195kmを高速で駆け抜けるこの競技は本当にタフであり、とてもカッコよくもあります。車いすスポーツの価値が認められつつあることはとても嬉しいことです。そしてこのような世界的なマラソン大会において、先導車両の後部座席でレースの様子を見続けられる経験は中々できないので、とても素敵な仕事を与えてもらったことに感謝したいと思います。

その他、ヘルプで障がい学生の住む寮でのパーソナルアシスタント(PA)にも行きましたが、部屋の天井にリフトがあり、トイレ、シャワールームへの導線が完璧になっているなど、総合大学の寮にこれほど整った施設があることはさすがだなと思いました。PAも普段は学生友人たちが朝晩の起床や就寝、シャワーなどをサポートし、PA探しも障がい学生がクラスメイトなどに自ら声をかけて自分に合った人を探していくなど、サポートし合って生活環境を整えていっている光景は学ぶことも多いです。プロではなく学生同士での介助なので、どのような手順でシャワーやトイレ、着替えを手伝って欲しいかなど、

障がい学生が細かく説明する必要がありますが、その説明もとてもわかりやすく、彼女らは言語化するのがとても上手に感じますし、それだけそのような言語化が求められる機会があるのだとも感じます。アメリカでは学生はボランティアをやることでクレジットがもらえ、その後の進学に有利になる場合も多く、コネクションができたり、実践の勉強もできるため、積極的にボランティア活動をする傾向にあります。日本の特に国立入試のようにほぼテストの点数だけで合否が決まる受験との違いを感じます。あとは宗教的にも forgive や donate の精神が根付いているというのもあると思います。何はともあれ、私も日本でPAの仕事をやっている、トイレやお風呂介助時の段差や狭さ、また頸損の方のお家では移乗等に毎度エネルギーを使っていたので、この部屋を見た時は感動しました。大学にこのような寮を数室整備することで、車いすアスリート学生だけでなく、パワーチェアで介助が必要な学生も大学進学がより可能になるため、とても重要な施設であると感じました。

このように毎日忙しい中でも充実した時間を過ごせている事に感謝したいと思います。



日常のリハビリ室の様子



ハロウィンは皆で仮装！



スニーカーの寄付を集めてお金に変え、金銭的に厳しい人がリハビリを受けられる機会を作る活動



車いすバスケクラス分け



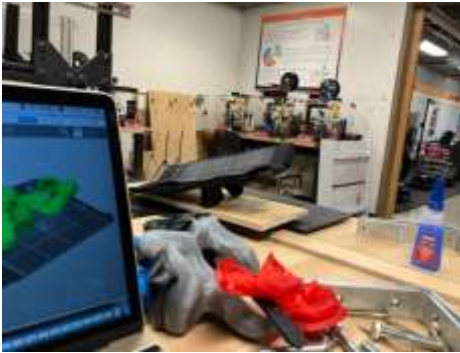
車いすバスケチームのストレングストレーニング



選手の測定など



簡易車いすのプロジェクト



3D プリンタでのグローブ作り



シカゴマラソン



ニューヨークシティマラソン



車いすバスケットボールリーグ